

浮世草子史の視点について

——かたぎの観点から——

西 島 孜 哉

はじめに

私は先に「気質物成立考」(文学史研究十四号)において、八文字屋から独立した江島其磧が、その書肆経営という問題もあって、それまで盛んに行われていた構成を重視した浮世草子に対抗して、西鶴の浮世草子から「かたぎ」を抽出し、総合、整理したかたちで純粋化して「気質物」を成立させたということを述べたことがある。その際、西鶴の浮世草子の「かたぎ」は、浮世草子の近世的特質であるという意味のことをのべ、浮世草子の展開を考える場合には、その「かたぎ」という観点を導入しなければならないということも合せて述べた。それに対して先学から「かたぎ」の観点についての説明がなされておらず、論の前提に欠けるところがあるという御忠告を賜った。発表が前後することになってしまったが、本稿は浮世草子の展開史のための前提となる「かたぎ」の観点について考察しようとするものである。

近世という時代は人間の復活をもたらしたいわれている。その

人間の復活はとくに遊興という性の解放面で強調され、遊里案内ともいうべき遊女評判記類が世人の需要にこたえて数多く出版されたのであった。藤井乙男博士はこの遊女評判記類と西鶴の浮世草子との関係について、最もはやく着目され、西鶴の浮世草子が、これら遊女評判記類をその直接の土壌としたものであるというすぐれた見解を示された(「西鶴の好色本と遊女評判記」、『江戸文学叢説』所収、昭和六年六月東京朝日)。このすぐれた見解は現在も引き継がれ、それ以後、西鶴の浮世草子を論ずる場合、これを前提とするようになっていく。それは同時に、西鶴の浮世草子の成立が、それら評判記類を文学的に昇華し、素材・対象の近似をこえて、西鶴のすぐれた人間観を吹き込んだところにあるという、評判記類との隔差を強調することになっている。いわば実用本位の評判記類と異った西鶴の浮世草子の文学的価値の問題となっているわけである。そのことの正しさはいままでもないことであるが、西鶴の浮世草子のみ問題とせず、浮世草子史全体の展開ということを考えるならば、いま一度、この評判記類と西鶴の浮世草子との接続が見直されるのである。西鶴と西鶴以後の浮世草子、あるいは仮名草子から浮世草

子という展開の中にも、西鶴が評判記類から得たものが共通してみいだされるべきものであらう。

そのような意味で、西鶴の浮世草子と素材・対象的に関係が深い『嶋原集』（明暦元年春刊）、『難波物語』（明暦元年五月刊）の遊女の評判を見直してみよう。

出雲

かほよし。少ししやくしにて、口もと悪し。様子もよし。心はまじめにて、物云はぬことしじまのごとし。たま／＼いはるれば、声炭をのめる予譲がごとし。お茶よし（嶋原集）

かこひあがりなり。むまれつきあふてきに、顔なかくぼに、はなすぢとをらず。こゑはさながら、鶯の春の日かげに、さえづるやうにはなくして、たこ都か、平家のうなりこゑに似たり（難波物語）

吉野

かほよし。さりながら、鼻珍しきまで高し。とりもちをぬれば、天狗のおとりになるよし。髪のてい見事なり。様子もよし。心はよし。一義の時のけい、くるわ第一なり（嶋原集）

はなのたかさ、おそらく也。くちをすふとき、つかへ侍る故に、ねぢゆがめて、た、みあげつ、すふべきよし、すい殿の口伝えられたり。普賢ぼさつののりしもの、あたご山のおやぢなどと、はなくらべせさせて見まくほしき事也。一儀の時、御音曲の出る事、珍重なる儀とて、人みな、これをしやうぐはんす（難波物語）

これらの評判記から、その素材・対象の共通性、人間観の共通性などがいわれていることであるが、その評判のしかたを見直すと、主

に外貌とか声とかいった外面から観察しうる要素をとりあげ、それをはかり具体的に論じているといえよう。また、西鶴の浮世草子にみえる遊女の手練手管の多くが、すでに評判記類にみえていることは指摘されているところであるが、その場合にも、その諸分秘伝等は、遊女の観察可能な行動を通して説明されることが多い。たとえば

雀の子飼

勝山とし十七也

或人問云ふ、何れのけいせいも、初対面には、食くはぬ也。それにて、夜食までは無食か。是如何。勝山の云ふ、すゞめの子がひと申す事有り。日くれがたに、あげやの居間にて、かみゆいなをす。其の時、あげやのか、か、又は、やりてが、ちやわんに、ゆづけいだし、ぬるみと名付け、食するとみえたり。されば、めしのほとびたるにて、そだつる故、すゞめの子がいと申し侍り（『ね物がたり』明暦二年二月刊）

にみるごとくである。このような人間を外貌とか行動とかを通して描写することは、評判記のもつ一つの特徴であらうが、遊里という特殊な対人間的制約のある世界、いかえると金と形式、いわば表面の虚飾にみちた世界を対象にして遊女評判がなされたということ、その描写が外面的な観察によらざるを得ないという制約を持つていたわけである。その意味で評判記の描写が主に視覚的なものとなつてしまっているわけである。また遊里という社会が近世の社会を象徴するものであると考えるならば、このことは、遊女評判のみに限られるものでなく、当世の世相・風俗全般についてもいいうるわけであらう。浮世草子に多く見られるようになった「かたぎ」の語は、それを象徴的にあらわしていると思われるので、そのような

外面的描写の方法を、「かたぎ」的描写と名付けたい。遊女評判記類と浮世草子の連接ということ、この「かたぎ」の観点から見直してみると、そのような「かたぎ」的描写が、評判記類から、その素材・対象とともに浮世草子へと引き継がれていったといえるのである。そしてその「かたぎ」の観点を通して、仮名草子から浮世草子へ、また西鶴から西鶴以後へという浮世草子の展開が考えられるのではなからうか。

一

西鶴の浮世草子は遊女評判記類から「かたぎ」的描写を受けついでいるわけであるが、そのことを「かたぎ」の語を検討しながら、西鶴と西鶴以後の浮世草子においてみてみよう。

「かたぎ」の語を文献に求めると、『文明本節用集』、『運歩色葉集』(天文十七年)、『鰻頭屋本節用集』(慶長年間)などに「形儀^{カタギ}」とみえる。一方、古く『下学集』(文安頃)に「容儀^{ヨウギ}」とあり、『正宗文庫本節用集』(室町期)に「形儀^{カタギ}」とみえる。これらの形儀・容儀は漢語で、元来、「みめかたち、たちゐふるまひ」という意味であるが、『文明本節用集』、『鰻頭屋本節用集』などでカタギと読まれたのは、中世室町期から行われ始めた湯桶読みの影響から形儀の翻訳が行われたものと思われる。つづいて『天草本イソポ』(元和頃力)には

その頃諸国の帝王より互に不審の勅札を送り、その不審を啓かねば、有る程の宝を奉らるるかたぎがござった。

今一人は熊と闘ったが、精力が尽くれば地に倒れそら死をした

ればかの獣のかたぎで死人には害をなさぬものぢや(原文はローマ字)

とあり、『甲陽軍鑑』(延宝)には

景虎当年十七才になり給ふが、晴信公の御形儀に少しも違はめと承り及び候

とあり、かたぎ・形儀の語がみられる。これらは「礼儀・しきたり・みめかたち・容姿」というぐらいの意味であり、本来の漢語の意味に近く、人間の外面から観察しうる行為・資質をさしているものと思われる。

これらにつづいて西鶴の浮世草子になると「かたぎ」「形気」と表現されて数多くみられるようになる。例えば、

ア 此の御坊に昼夜哭^{なみ}かされて、らうさいかたぎに成りけるが(『一代女』六の四)

イ 此の問屋に数年あまた商人形気を見及びけるに、はじめての馬おりより葛籠をあけて都染の定紋付に道中着物を脱ぎかへ、皺皮取りすて、新しき足袋、草履、鬢撫でつけて、咬へ楊枝誰にか見すべき采躰をつくるひ、此のあたりの名所見に行とて、用を勤めし手代を案内につれける人、今迄幾人か、して出られしためしなし(『永代蔵』二の五)

ウ 男子は有徳なれば、自由に孝をつくし、毎日世の初物をはこばせ、殊更お茶のかよひのためにやさかたなる女四五人付置きしに、寝間のあげおろしも人の手につけ給はず、墨衣をきぬばかりの出家形気になり給へば、めしつかひの者どもおのづから信心のおこし(『桜陰比事』一の二)

エ むかし都の町人世わたり有徳にして、三条の縄手に下屋敷を

こしらへ、折ふしのあそび所なり、久しくめしつかひたる手代隠者形氣にて市中にまじわる事をこのまざれば、此の屋敷を是にあづけ心まかせに暮させける（『桜陰比事』五の七）

オ 今程は以前の形氣は捨て申し候、兎角、生国なつかしく、皆々様へ御出入り申し、せめて雨風火事などといふ時分かけつけ、御用に立ち申し度く候、前の事御ゆるしくださるべく候、皆酒ゆへ身代取乱しおの／＼様にも御やつかいかけ申し候、只今は五節句にもたべ申さず候（『萬の文反古』一の二）

カ 掛乞ひとけんくわする心と、人がくれたればとて、あたら伽羅を一日に焼捨て、国土の費えをして、道人のやうに見せかけ、世のおそれぬ貞つきして神鳴のすかぬ時は抹香を焼くもおかし、形氣を作らずして身を其まなる人こそ殊勝なれ（『名残の友』一の二）

などであるが、これらの例についてみると、アは、結核患者のような外貌をさしている。イは、商人が問屋に到着して、どんな行動をとるかを観察したもので、商人にみられる外見的な行動及び服装を述べたものであり、その観察しうる態度をもって形氣とみなしている。ウは、八十余歳まで一心に金を貯めてきたしわい男が仏心をおこし寝間のあげおろしまでするという態度をさしている。エは、手代が市中にまじわらず下屋敷に隠者のごとく引きこもっているそのような隠者的外見をさしている。オは、若い時の酒ゆえに身の放埒を後悔した男の詫状で、その若い時の行ない、あるいは態度をさしている。カもやはり道人然として世をおそれぬ貞つき、あるいは抹香を焼くなどの行為をさしていると思われる。

このようにアからカまでの形氣をみるに、外面的に観察可能な範

囲をさしているのである。漢語の形儀本来の意味を濃厚に残し、表情・行動・服装などの形に重点がおかれ、人間の内面的なものをさす意味あいはいはあまり含まれていないように思われる。西鶴はその『武家義理物語』の序文で、武士・神主・出家・百姓・職人・商人などの区別はそれ／＼の形態にあると述べ、人間の一心は万人ともにかわることがないと述べている。この序文の解釈については、諸氏によつてわかれるところであるが、そこには人間観があるとともに、西鶴の人間観察の方法がこめられているのではなからうか。西鶴は当世の人間をその外面的な観察によつて把握し、たとえ「かたぎ」の語を用いて表現していなくても、容貌・表情・行動・服装などを描くことによつて、その内面までを、文学として形象しているといえるのではなからうか。

このような「かたぎ」に「氣質」の文字をあてはめたのは、其磧の『世間子息氣質』（正徳五年十二月刊）であろう。しかし、その『子息氣質』には、各章に小題がついているが、それには「木賊売りは心を磨く正直な百姓形氣」（一の一）以下すべて形氣の文字を用いているので、其磧は氣質と形氣とを明確には区別しているとはいえない。『子息氣質』につづく『世間娘氣質』（享保二年八月刊）についてみると、

往古は律氣千万なるを人の娘氣質と申し侍りき。近年は人の娘内儀もおとなしからずして、けいせい・遊女・しばるの女形のなりさまをうつし、籠持たぬ靈照女の絵を見るやうに、胸高に帶して男のすなる袖口ひろく、据え腰蹴出しの道中、我身を我儘にもせず、人の見るべくを大事にかけ、わき顔にうまれつきし痣をかくし、足くびの太きを裾長にしてつゝみ、口の大きなるを俄につ

ぼめ、いひたい物をもいはず、思ひの外なる苦勞をするは今時の女ぞかし。つれそう男さへ堪忍せば、鼻の穴の内つら迄磨きかけずともくるしかるまじ（一の二）

とあり、これは西鶴の『好色一代女』（貞享三年六月刊）の「むかしは律気千万なるを、人の女房かた気と申し侍りき」（三の四）の部分をはほぼ全部剽窃して、自己の作品の冒頭に据えたものである。其磧が西鶴の作品を出発点として、常に模倣、剽窃に終始していることを思えば、『一代女』の「かた気」と『娘気質』の「気質」とは連続した概念であり、其磧における気質の概念は、西鶴のかたぎの影響を濃厚に残しているといえよう。

しかしながら、江戸時代も正徳・享保まで下ると幕府の文教政策もようやく社会に浸透し、儒学なかでも宋学が大に行われるようになっていく。その宋学の最も其本となる『朱子語類』に気質（キシツ）について次のようにみえる。

有天地之性 有気質之性 天地之性 則太極本然之妙 萬殊而一本也 気質之性 則二氣交運而生 一本而萬殊也（四、性理）

これは、本然の性（天地之性）と後天的の血氣の性（気質の性）があり、本然の性が理から生じ純一無雜、寂然不動であるのに対し、気質の性は気から生ずるので気の清濁・昏明・厚薄によって、その性におのずから差が生じて、人の善悪・賢愚が生じるといった考えである。これは性理学として行われ、同時に社会的には徳教的・教訓的な意図を含んで行われていたものである。其磧がこの気質論に対して教養をもっていたことは説かれているが（石川潤二郎氏「江島其磧・気質物叙説」国文学研究・昭和三十三年）、この教訓的教理の流行を敏感に感じとっていた其磧が、八文字屋からの独立によ

って「気質物」という新機軸の開発の必要性が生じたとき（拙稿「気質物成立考」文学史研究十四号）、その教養を生かしたものである。そこに「形気」にかえて、本来「きしつ」と読まれるべき「気質」の文字を用いた意図をみることが出来る。その意味で『一代女』における「女房かた気」などと、其磧の気質の意味には、若干の相異があり、西鶴におけるかたぎに、教訓的意味あいが加味されているのである。いいかえれば、善悪の判断に供する一つの手本として形象されているのである。たとえば、

上歌舞伎なる最中に生れ合せし惣領の万助が至り形気、稚い時から辛い目を見ず、饒に育ちて、己が家業の日廻し銀の算用さへしらず、覚帳は上書きする時に見たばかり、読みおふせても公家にはならぬ三十一文字に首を傾け、韵字をふみて花を眺め（『子息気質』一の三）

のごとくである。西鶴は『新可笑記』（二の二）で、籠舎した次兄をたすけに行つた惣領のかたぎと妹のかたぎを描いているが、長者になつてから生れた妹のかたぎをのべて、結果、人間性の深奥に言及しているが、其磧はその娘のかたぎを子息の気質としてとり出し、より詳細に描いているわけである。其磧は町人の子息でありながら家業をおろそかにして遊芸にふけるといふ、ぜいたく好きの気質を詳細に描いているが、そこには西鶴のように人間性の深奥にふれるということはなく、これを悪の手本として、まねてはならないという教訓的意図が表面にあらわれているのである。

其磧によつて「気質」の文字があてられるようになってから、それがほぼ一般化され、同時に気質の詳細化と整理が行われていったが、一方では「気質」を漢語意識なく音読して「きしつ」と読んだ

り、あるいは「きだて」「こころばえ」などと読んだりするようになった。それとともに現代の気質の概念にちかづいて内面的意味あい
が濃厚になってきているのである。たとえば、

彼鳥の羽にて頭より鼻を撫でおろす事三遍にして、其の人の気
質病根をさす事神のごとし（『諸道聴耳世間猿』五の二、明和三年
正月刊）

僕幼を愛して其の無我なる気質を師と頼み（『小児養育質氣』

序、安永二年三月刊）

弟の伊兵衛は兄の気質とは若干の違ひにて、生得の廉直より、
迂作つかず追従嫌ひにて身持ち万事に高情を好み、兄の吝嗇を憎
みて（『諸道聴耳世間猿』四の一）

つれ／＼なるままたきはさしおき、硯にむかひ心にうつりゆく
美醜こしもの気質を（『世間侍婢気質』序、明和八年正月刊）
などにみえるごとくである。しかし、その反面、気質の概念は具体性
に乏しく観念的傾向を強くあらわすようになっていく。

以上のように「かたぎ」から「気質」への変遷はあつても、それ
は「かたぎ」的描写に別な要素が付加されたことであり、人間をそ
の外面的な資質や行動などで描写する「かたぎ」的描写は、浮世草
子を通じてうけつがれているといえよう。このような描写が、近世
的な特質として遊女評判記類から浮世草子へと受けつがれているわ
けで、「かたぎ」「気質」の語は、それを象徴的にあらわすものと考え
られるのである。

さて遊女評判記類から浮世草子が「かたぎ」的描写を継承してい
るといふ「かたぎ」の観点をのべてきたわけであるが、一方、遊女
評判記類と同時代に盛行していた仮名草子との間にはどのような連
接が考えられるのであろうか。「かたぎ」の観点にたつて、仮名草
子と浮世草子について改めて検証してみよう。

西鶴の初期の浮世草子と同じく恋愛を題材としていても、近世初
期の『恨之介』や『薄雪物語』などの仮名草子は、中世の伝統的な
物語の形式を踏襲するものであり、文章も幸若・謡曲・御伽草子な
どの行文を借用した七五調で古めかしい。ただ、これらの仮名草子
が近世小説の先駆であるといわれるのは、その中に近世的な素材・
対象、あるいは近世的俗語などが混入してきているからである。こ
の点は少し時代が下る『竹斎』や、『仁勢物語』などの擬物語にも
共通していることであり、これらの仮名草子から、遊女評判記と浮
世草子にみえたような「かたぎ」的描写を抽出することはできない
のである。ただし、近世的素材・対象は時代を追って増加している
ことが検証される。このような素材・対象の増加をもつて浮世草子
に近ずいたということはできないと思うが、ただこれらの増加につ
れて、その描写も徐々に変化してきているようである。その意味で、
天和二年刊の『好色一代男』にもっとも近接し、また浮世という名
を持ち、浮世草子にあと一步のところにあるといわれる『浮世物語』
（寛文五・六年頃刊）について検討してみよう。よく知られたもの
であるが、その内容は、

憶病侍から要領よく町人となつた男を父にもつ「とびあがりの
瓢金」な瓢太郎という町人の息子が、堅気の武家奉公もつとまら
ず博奕・傾城狂いで無一文となり、若党・浪人をへて出家して浮

世房と名をかえる。京・大阪を見物したのち、大名の咄衆となつてもつともらしい教訓をたれたりするが、最後は蛻仙となつて行方知れずになる。

といったもので、講成は『一代男』と同じく、浮世房の一代記の型をとっている。巻頭の一章「浮世という事」にみえる浮世即享樂生活とする近世的な意義は、はやくから指摘されている（頼原退蔵博士「うきよ名義考」、『江戸文芸論考』所収、昭和十二年十一月）。その浮世の講成要素である博奕・傾城狂い・四条川原の有様などの近世的素材・対象は、かなり大幅にとりあげられている。『好色一代男』にみられるようなそれらとの積極的なかわりあいはいはみられず、同時にその浮世に対する姿勢がかなり否定的であり、また主題的には世相見聞に、政道批判・処世訓・笑話などを含みこんだ雑多な内容をもっているのであるが、素材・対象的にはすでに浮世草子と軌を一にする面がみえているのである。しかしながら浮世房の人物形象をみると、

今は昔、浮世房とて、浮きに浮いて、瓢金なる法師有りけり。
その俗姓は、幼き時より鼻垂れければ、藤氏の末孫なりとも言ふ。
又幼き時は鼠舞ひ・小路隠れをして、人の家の軒の下に起き臥し
せしかば、橘氏かと言ふもあり。又や、もすれば、門脇に住み
ける程に、平氏の一族かとも言ふ。それにてはあるまじ。只饅頭
を数奇ければ、源氏の流れなるべしと、とりどりに申しけり。
などと、古典によりかかった洒落を用い、具体性に乏しく、また、

かくて年を重ねる程に、親は身まかりぬ。これより身持ち我儘
になりて、足を空になし、小鳥を落し、魚を釣りて、此処彼処遊
びさまよふ浮れ者と成りにけり。

一手先も見えぬ飛び上りの瓢金なりければ、名をだに人なみに
は付かで、瓢太郎とぞ言ひける。

など平板な形象に終始し、わずかに「ここかしこであるく」という
程度で、「かたぎ」をもつて形象するところがない。ところが、傾
城狂いで島原へ通ふ瓢太郎を描写することになると、その素材・対
象のもつ具体性もあいまって、描写法が変化している。少し長文で
あるが引用すると、

我が家をばさらぬ由にて立ち出でつゝ、道にて歩荷物の乗物を
借り、これに打ち乗りて、大宮を下りに丹波海道を嶋原口まで行
き到り、此処にて乗物は帰しつゝ、編笠引きこみ、衣紋の馬場・
噂町をうち過ぎ、揚屋町にさしか、り、やがて揚屋の中二階に駈
け上り、日比知音の太夫に逢ひて、ある時は口舌を仕出し、大に
振られて馬を繋ぎ、又ある時は後の世までと語らはれて、命を塵
とも思はず、太鼓衆にうち囃されて、鼻の先うぞやきうぐぐと
して笑ひどよめき、日毎に通ふ程に、金銀を遣ふ事水の如く、親
の蓄へ置きたる物ども惜しげもなく遣ひ崩し、持ち運ぶ余りに、
興じて後は人目をも包まず、袖のなり大そぎて、襦袢高く引き回し、
幅の広き帯後に結び、敲き鞘の中脇差金鑢をぎらめかし、畝刺の
踏皮にぼたんを入れ、席駄を鳴らして出で立ちける有様、月代は
耳の元まで剃り下げ、鬚薄く、鬚喰ひそらし、蘭栖の大編笠目深
に引きこみたれば、そのなりふり良しと言はん、悪しと言はん、
ん、殿中風の直中なり。

のごとくである。前半は島原へ通うという行動を、後半は当時の伊
達者の風俗を詳細に描いている。かなり具体的であるが、主人公瓢
太郎の行動と風俗とが有機的に結びついて、そこに人物像がいきい

きと浮き出してくるということではなく、全般的な紹介に終わってしまっているところがある。しかしながら人物をその行動・外見などから描くという「かたぎ」的描写の萌芽はみとめられるのである。このような箇所はわずかにしかみられず、同じく遊里を対象にしても、傾城を描くと、

柳の髪たをやかに、花の顔ばせ麗しく、黛の色は遠山の緑の木末に異ならず、赤く笑める口元は初めて開く芙蓉の花、磨ける歯は白くして、さながら雪の如く也。

のように、御伽草子などの中世風な美人の形容を用い、美辞麗句の羅列に終わってしまったのである。

以上のように『浮世物語』では、近世的な素材・対象の大幅な増加、あるいは主題的な変化がみられるのであるが、近世的特質ともいべき「かたぎ」的な描写は、わずかにその片鱗をのぞかせたにすぎないのである。

そのような『浮世物語』に対して『好色一代男』の人物形象はどうであろうか。周知のごとく『一代男』は内容的に見て、世之介が色道の達人となるまでの成長の過程を描いた巻四までの二十八章と、三都を中心とした遊女列伝ともいべき後半二十六章に分かれ、その前半二十八章は、野暮から粹に成長する過程を『色道大鏡』巻五「二十八品」に倣い、その抽象的な叙述を世之介を通じて形象したものであるといわれている（野間光辰氏『定本西鶴全集』才一卷解説、昭和二十六年八月）。世之介はこの前半四巻に好色的怪物として変幻出没しているが、一つの個体的な存在としてではなく、当時の浮世男・好色男・当世男の複合的な存在として描かれている。一個の人間としての実在性に乏しく、矛盾した人物像が錯綜している

のであるが、各章にあらわれた世之介像の総合体を当世の浮世男の一典型としてみるならば、仮名草子にはみられなかった人物形象であることに気付く。各章とも世之介の行動が具体的かつ詳細に描かれ、同時にその行動と有機的にむすびついた服装とか髪型などが、その必要に応じて加えられているのである。こころみに一例をあげると、巻一才三話（人には見せぬ所）の九歳の世之介像は

鼓の「跡より恋の責めくれば」ばかりを明暮うっている。銀見習いに出されると「はや死一倍、三百目の借り手形」をする。女の行水を「四阿屋の棟にさし懸り、亭の遠眼鏡を取り持ちて」盗み見し、「初夜のかねなりて人しづまって後、これなるきり戸をあけて、我おもふ事をきけ」と忍んで行き、芥子人形など与えられても、「うれしそうなるけしきもなく、やがて子をもつたらば、それになきやます物にもなるぞかし。此のおきあがりそなたにほれたかしてこけ懸る」といひさま膝枕して寝てしまふ（括弧内は本文引用）。

というように描かれ、世之介の九歳という年令に不釣合いな好色的行動を中心に描き、その外面的観察を通して、世之介の好色的人物としての怪物像を、いきいきと浮かびあがらせているのである。

このように『好色一代男』の人物形象は、「かたぎ」的描写によるものになっている。西鶴は仮名草子において徐々に増加してきていた近世的素材・対象を、「かたぎ」的描写によって形象したわけである。その「かたぎ」的描写は、はじめにのべたように遊女評判記類を土壌として発展したものであった。その場合西鶴の天才による文学への昇華があったわけであるが、西鶴の周辺、あるいはそれ以後の浮世草子と、仮名草子との間には、文学的価値においてそれ

ほどの開きがあるわけでもない。浮世草子史全般からみた仮名草子から浮世草子への史的展開は、仮名草子に増加してきた近世的素材・対象を「かたぎ」的に描写すればよいという、あと一步のところまでできていたといわねばならないのである。また同時に、この「かたぎ」の観点に立つことによって、仮名草子から浮世草子への展開において遊女評判記類の果たした役割も理解されるのではなからうか。

おわりに

浮世草子史の展開は、以上のように「かたぎ」の観点に立つてみるならば、仮名草子との区別、遊女評判記類との関連、あるいは西鶴以後の浮世草子への展開という点で、一つの基本的な座標軸をもつことができよう。従来においては、浮世草子の展開を論ずる場合、便宜的という但し書きのもとに、初期浮世草子からその素材・対象の変遷をあとづけることがなされる。たとえば、好色物から三味線物、町人物から気質物などの系譜が考えられているが、好色物・町人物などの含む素材・対象の複雑さは、その展開の説明にあいまいさを残してしまう。また素材的な面に限っても、好色物、町人物がそのまま肉付けされて直接三味線物、気質物へと展開しているものでもない。浮世草子の展開の説明としては便宜的とならざるをえないのである。

たとえば、気質物は町人物をその母胎とするといわれる。場面が町人の実社会であるという素材・対象を重視するならば、この系譜は明らかに正しい。しかしながら、気質物『世間子息気質』は、

西鶴の『好色一代女』をその成立の要因の一つとしていた(拙稿「気質物成立考」文学史研究十四号)。このことは、好色物からの展開も合せて考えなければならぬことを意味している。いわば『子息気質』は好色物からも、町人物からも展開しているのである。それが主として町人の実生活をその場面としていることから、町人物からの系譜が重くみられるわけであらう。しかしながら、気質物はそのような素材・対象的な問題とは別に「かたぎ」的描写という浮世草子の特質を凝集して受け継いでいるのである。

そのような意味で、やはり浮世草子の展開を考える場合には、「かたぎ」的描写という浮世草子の近世小説としての特質が、他の要素の影響によって、どのように消長しているかという視点をすえなければならぬのではなからうか。そしてそのような視点にたてば、浮世草子の展開の素描は次のようなことになる。

西鶴の浮世草子の盛行の後には「かたぎ」的描写で当世の世相、風俗を描くという浮世草子の特質を圧迫して、いわゆる中世から接続している講成を重視する浮世草子が盛んに行われていた。そのような浮世草子は一つの流れとして末期へとひきつがれていくが、一方、江島其積は西鶴の浮世草子から近世的特質である「かたぎ」を抽出し、総合整理して純粋化し「気質」という形で復活させ、気質物を成立させた。その後、気質物は構成重視の浮世草子と複合するようになり、誇張された形で浮世草子の末期へとひきつがれていった。そして「かたぎ」ということが常識的となった時代に浮世草子の展開は終りを告げたのである。

〈付記〉

本稿を作製するにあたっては、森修先生の御指導にあずかっている。銘記して感謝申し上げます。